



# 過去作品



光野 朝風

## 輝きの「R」

---

あなたはよくわからない人。でも、とても落ち着く人。

いつごろ知り合ったのかな。最初はなんでもなかった存在が、いつしか近くになって、見守られている安心感に包まれている。

いつもどこからか現れて、泣いているときや、辛いときに、そっと手を差し伸べてくれる。

いつもあまりメールなんてくれないのに、私はあなたのことを思う。私が「助けて」と言ったらいつもタイミングよくメールをくれる。不思議な人だと思う。

今日は朝から雨が降っている。草花を濡らす雫は重い空から降ってくる。少し、空模様と同じように、気分が晴れない。私は子猫のように毛布にうずくまる。

リビングの窓から見える景色は、私の孤独を誘う。

私は「キミ」のことをいつも考える。あなたとは違う、大好きだった人……でも、今でも心の中では永遠に生き続けている人。キミは私の永遠の想い人。

ごろんと転がって、また外を見る。すぐ何度も外を見たって天気が変わるわけじゃない。雨の景色……外に濡れる花たちは何を想っているのかな。私と同じように大事な誰かを思い出しているの？

傘をさして外に出かける。家にいられなくなって、粒に傘を打たれながら歩く。

散歩道を歩きながらキミと一緒に歩いたことを思い出す。思い出はいつも私の中で繰り返されて、苦しくなったり、切なくなったりする。

ふと見つけた、濡れた青い紫陽花。月の光に照らされたように美しく輝いている。この雨の中、空に押しつぶされることなく、咲き誇っている。光の中にあった鮮やかな青よりも、雨に打たれている青は美しかった。

雨の香りに包まれて、濡れた紫陽花の中の冷たい光にただようあたたかさを感じた。光の中で恋模様のように姿を変える。恋……私はいつもキミに会いたいと思っている。キミを思い出すたびに、私はキミの幸せを祈る。

「好きだよ……」

紫陽花にそっと触れて言ってみる。指先が花の雨粒で濡れて、手が雨に打たれる。最後にキミに触れた時、とても冷たく感じたのを思い出す。

こんなに近いのに、すれ違っていく。キミとの距離はとても近いはずなのに、とても遠かった。手を伸ばした紫陽花との距離ほど、キミは近くて、触れられなかったんだね。

でも信じていたよ。いつも私のことを想ってくれているって。君との空は繋がっているけれど、キミには私だけではなく、もっとたくさんの人に信じてもらえるような素敵の人であって欲しい。

「愛しています……」

ふっと言葉を、どこかでキミとつながっている空へと投げかけるようにつぶやく。雨がずっとやんできて、雲間から光が差し込んでくる。

傘をたたんで、明るい空へと瞳を向けると虹が出ていた。

暖かい虹が空にかかり、私の心にもかかるようだった。

まぶしい時間の中、あなたからのメールが届く。

「今日は晴れ晴れとして気持ちのいい日です。心はちゃんと晴れていますか？いつもあなたを見守っています。貴女は優しい人だけれど、切なさに身を埋めてはいけません。だって貴女は愛されているのだから。貴女はそこにいるだけで人を優しい気持ちにさせるから、泣いてばかりはいけません。大事な人がいるのなら、大事だと思える人がいるのなら、その人たちを悲しませるようなことはいけません」

いつも、あなたはこの空みたいな存在。私が寂しい気持ちで怖い時間を刻まないのは、あなたの存在があるからだと思う。

あなたはいつしか空気みたいな当たり前の存在になっていた。私が自然と息をするように、そばにいるような気がする。私はキミのことを思い、キミの思い出や重さに潰れちゃいそうなくらい心が弱くなったときも、転んだ少女を抱き起こすような優しさは伝わってくる。

キミのこと、忘れちゃいそうになって、子供みたく泣きじゃくりたくなる。私の心が消えてしまいそうな気持ちになる。思い出は薄れてしまうものなの？失ってしまいそうな悲しみがたくさん襲って来て、私は立ってられなくなる時が

ある。

そんな時、やっぱりあなたからメールが来る。

「泣いてもいいんだよ。でも、悲しみに心を埋めてはいけない。自分は悲しい存在だと思っちゃいけない。悲しいのなら、私の存在だって悲しくなってしまう。だから、幸せだった日々を、時間を思い出して。幸福と不幸は、いつだって背中合わせ。悲しみだけではなかったはず、切なさだけではなかったはず。失った絶望よりも、得てきた希望に目を向けて。過去という名の宿命こそ、未来を作るのだから。貴女は生きている。だから未来へと生きて。過去を失えというんじゃない。過去という悲しみや喪失で心を削るのではなく、過去という幸福で心を未来へ歩かせるんだよ。それこそ希望に繋がるのだから」

あなたは誰なんだろう。あなたはどこから来たんだろう。まるでこの空からやってきて、私の元に舞い降りた天使のよう。会ったことがなくても、こんなに私の心の近くにいる不思議な人。私をちゃんと叱ってくれて、私を優しく抱き起こしてくれる人。メールだけの人なのに、もうメールだけの人じゃなくなっていた。

深呼吸すると、お日様の匂いがした。草木の匂いがふわりと漂う。家に帰ろう。左薬指に光る指輪をなでて、私はただ傘をくるりと回して大きな円を描いた。水しぶきが散って、空へと消えて、夕闇を誘っていった。

家に帰ると、オレンジ色の光が窓から部屋へと差し込んでいた。オレンジ色の花を思い出させる。キミとドライブに出た帰り道、オレンジ色の風に吹かれながら、キミは私のことを一生懸命思っていた。たくさん私のことを心配してくれていたね。

ひとりぼっちが怖かったから、いつも泣きそうになっていた。でもあの日の風は、途切れそうな糸をそよ風のような優しさでぶつりと切った。私も気持ちが心地よい風と一緒に飛んでいった気がして、オレンジ色の花が目飛び込んできて、心に溶けた。

あふれそうになる涙を必死に隠して、外を眺めているそぶりでなんでもないようにふるまって、まるでさよならと手をふるように揺れるオレンジ色の花を見ていた。どうして流れてくるのかもわからない涙を手でぬぐうことはなかった。キミは気がついてたのかな。頬の濡れている間に涙のことを言うことはなかった。

オレンジ色の花。あんなに綺麗だったのに、あんなに切なかった。

雨上がりの夕日はとても綺麗で、ベランダの窓を開けた。沈む夕日が夕闇に飲まれる雲を筆を走らせたように染めている。扇状に伸びる光も、やがて短くなり、夜が訪れる。

あなたからのメール。

「今日は満月だね。もうこの時間でも月が見えているよ。貴女にも見えているかな。いつも見守っているよ。雲に隠されようと、私はちゃんとここにいるのだから。見失わないで。心の目を閉じてはいけないよ」

寝る前に、ベッドのシーツにくるまりながら、あなたからのメールを見る。急に月が見たくなくて暗くした部屋のカーテンを開ける。外には丸い月。優しい光。もう一度ベッドにもぐりこんで淡い光を見つめる。

光はまるでか弱いキミの声のようで、目を閉じてしまえば忘れてしまいそうで、つかめないようで、包んでいる。

話したい。また話したい。忘れたい。忘れられない。何をしに、私はまた戻ってきているのだろう。過去の思いに。オルゴールのような切ない音色を奏でる思い出に。

名前を呼んで振り向いたキミ。キミの顔を思い出したよ。キスをして、優しく抱きしめてくれた。最後のキスになるとも知らずに。

月に名前はあるのかな。呼ばなくても、当たり前のようにいる。ずっと見ていてくれる。気がつかなくても、思わなくても、そこにいる。どうしてなの。どうしてそんなに優しいの。月の光は涙にも似ている。もしそうだとしたら、私が残らずすくってあげたい。キラキラ流れる涙の美しさに、私は見惚れてしまって、目が離せなくなる。雲がささぎったら、雲をかきわけてでも、光を浴びにいきたい。

夜の誘いに、私はいつの間にか目を閉じる。星の輝きを夢へと連れて行くように。

そして夢を見る。

夢の中、最初私は真っ暗闇にいた。雨が降っているようで、ポタポタ、パタパタ、ピチピチ、雨粒が色々な音を打つ音がする。真っ暗闇で動けない私は、そこから動けずにいた。雨に打たれて凍えそう。とても寒い。体が冷たくなって不安で寂しいと震えだす。怖い。壊れてしまいそうなくらい。

誰かが私の耳元で言ってくれた。その声はとても落ち着く。優しい声の男の人。でも、誰かはわからない。

「貴女の心が真っ暗なら、私が照らしてあげる。凍えているなら傘をさしてあげる。キミのためならなんでもできるよ」

彼が言うと、暗闇が晴れた。隣には男の人。その手に傘を持って。

「霧はもうすぐ晴れる。この雨もやんで、綺麗な空がくるよ。私は貴女の心をいつも守っている」

私はここが私の夢の中だとわかっていて、聞く。

「ここはどこ？」

「ここは貴女の心」

わかっているのに、不思議な場所。私のいたところよりも、どこか美しい。そんな気がする。雨がやめばきっとわかるのに。

「雨に悲しまないで」

あなたは私にそう言った。

「命を育むには、多すぎない量だから、この雨は優しい」

あなたは傘をさしながら寄り添ってくる。ぬくもりが触れてあたたかい。

どうしてだろう。あなたを前から知っている気がする。初めて会った気がしない。まるでずっと一緒にいたかのように、彼の息づかいまで懐かしい気がする。私の安らぎだった気がする。ずっと忘れていた気持ち。

不思議な感じがする。あなたは、どこから来たの。あれ……あなたは、どこから来たの……。どこかで思った気持ち。ああ、いつもメールをくれるあなた……。

やがてあなたが言ったように雨はやみ、まぶしいほどの光が差し込んでくる。目の前にピンク色の花畑が続いている。

「あなたは、とても優しい色をしているね。行こうか」

あなたは私の手を力強く引く。

ピンク色の花の中にはよく見ると、ところどころに赤や白が混じっている。一面のバラの花畑だった。優しい風に乗って香りがすーっと染み渡ってきた。心が癒される。あたしの好きな色に囲まれながら進む。

棘の見当たらないバラ。棘がないのは、きっと誰も傷つけないから。雨上がりの雫を宝石のように見にまといながら輝いている。

近くの木々から小鳥が鳴いているのが聞こえる。私はあなたに引っ張られて丘の上へと上っていく。

丘の先が見えたところで、あなたは立ち止まる。よく見ると、目の前にガラス張りのような大きな壁があって、扉が見える。

「ここを開ける鍵は貴女が持っているよ」

私は戸惑う。そんな鍵なんて私は持っていない。

「え？……私、鍵なんて……」

「気がつかないか。いつも運命を切り開くのは貴女。未来の鍵は、心の中にある。信じて。想いの力を」

想いの力……。信じることは簡単なようで難しい。

「貴女には力がある。心という力が。言葉という力が」

私はいつもあなたの言葉に励まされてきた。あなたはいつも私の側にいてくれた。今度は私が、頑張る番なんだね。見つけられないんじゃない。見つけるんだ。私は、見つけにいかなくやいけないんだ。

間違っていたのは私。明日にはまた生まれ変わっているのに、気がつかないことが間違いだったんだ。

「手を強く握って」

あなたに言うと、力強く握ってくれた。信じること。想うこと。触れ合うこと。そして、未来が開けること。鍵は、私が持っている。

力強く握った瞬間、私は手の平の中に、何かが握られていることに気がついた。鍵だった。

私はその鍵をガラスの扉に差し込むと、溶けて行くように消えていった。

「さあいこう。もうすぐだよ」

あなたの力強く握られた手は私をぐいぐい引っ張り、高い丘の上まで連れて行く。

「見て。ここが輝きの海だよ」

見ると太陽の光で輝いた海が一面に広がっている。二重の虹の輪が下のほうにかかっている。凄く綺麗な景色……

私が見蕩れて手を離すと、あなたは丘の上から海へと飛び込んでしまった。そうすると、海はどんどん輝いていって、私の体は光に透き通るようになって、やがて全部溶けてしまった。

夢から目を覚ますと、朝。窓からまぶしい光が瞳に射し込む。

あなたからメールが入っている。

「おはよう。まぶしい朝だよ。いつもひとりぼっちじゃないよ。空が泣けば次は笑う番さ。今日という幸福をあなたへ」

不思議なメール。毎日プレゼントをもらっているような気持ちにもなる。嬉しくて、安心する。

夢の中で見たバラの花。私は大好きなローズヒップティーをいれて飲む。

もし、私がああの海に飛び込んだらどうなるのかな。怖がってばかりじゃ、きっと何もわからない。

紅茶の香りが胸へと広がる。幸せが、いつの間にか当たり前になって、幸せだと思わなくなってしまう。それはとても悲しいこと。食べることや、勉強することや、仕事することや、側にいてくれる人がいること。幸せなこと。

今日の朝はとても気持ちがいい。夢を見たせいだろうか。お気に入りのピンクのワンピースで外に出かけよう。帰りに甘いチョコレートを買ってこようかな。

今日はたくさんの幸せに満ちている。不安が消えた心には、期待を超えて、たくさんのものを包もうとしているのがわかった。

太陽が大地を輝かせている。そして、私の心には夢の中で見た綺麗な虹がかかっている。あなたと、私を繋げる、輝く虹が。

## 月のくじら

---

「やめなよー。アキコおやじみたいだよ？」

いつだか言われた友達の言葉を思い出しながら、缶ビールのふたをプシュリッと開けて、急角度に傾けて口いっぱい

のビールでのどをグビグビと鳴らしていく。

（あんたこそ肌に化粧が乗ってなくてガサガサだよ）

心の中で嫌味を言いながら、プハー、と夜空にむけて声を上げる。「これがいいのに」と一人でポツリと言う。胃の中に流れ込む発泡の刺激が染み渡る。

晴れの日にはベランダで月を見ながら一人で晩酌するのが日課のようになってしまった。

風に吹かれながら、仕事終わりの疲れやストレスをぼんやりしながら忘れ去ろうとすると、どうしても色々頭に思い浮かんでしまう。

「ねえ、アキコそろそろ彼氏でも作ったらどうなの？誕生日一人で寂しくない？」

「そういうあんたはどうなの？」

「え？あたし？あたしはねー。今日デートなんだ。ごめんねー」

会社の昼休みでの会話を思い出しながら、少しいライラする。明日は誕生日だというのに、今年も確実に一人で過ごすことが決定した寂しさや悔しさが、泡のようにふつつつと怒りとなって湧き上がるようだった。

「なにが、ごめんねー、だ」

一気に一缶を空けてしまい、冷蔵庫から二缶目を取ってきて、飲み始める。

「いい年してかわいこぶってさ。あたしのほうがちゃんとしているのに、あたしのほうが仕事もできるのに」

ビールを飲みながら一人ベランダでぶつくさと独り言を言っていると、まるで自分自身を慰めているようで惨めになる。そのことが余計に腹立たしかった。

思えば毎日のようにイライラしている。会社でも家でも、まるで心の休まる暇がなかった。何をしても充実しない。何をしても「何かしなきゃ」と思ってしまう。どうして何もしていなくても、何かしていても、自分が焦るのか理解できなかった。

「どうしちゃったんだろ・・・あたし・・・」

自分で心の余裕がなくなっていることはわかっていた。時々友人にも「もっと心を広く持ったほうがいいんじゃない？」と言われることがあった。

「そんなのわかってる。でも、どうすればいいのさ」

出口のない迷路で壁に八つ当たりする子供のようにふてくされていた。嫌なことばかりが思い出されて、そのすべてが許せない気分だった。

「それにしても、今日は月が綺麗」

よく澄み渡った空だった。満月の光が夜空に染みこんでいるようだった。

アキコがしばらく風に吹かれていると、空の向こう側に飛行船のようなものが見えた。

「あれ？あんなところに何か飛んでる」

夜に飛行船？そんなはずない。飛行機なら納得できそうだけど。気球よりも横長だから絶対飛行船だ。

アキコはビールを飲むことも忘れて、月の側の黒い影をじっと見つめていると、その影はどんどん大きくなっていく。月の光の中に影が入ると、少し飛行船とは違う。尾びれがあって、ひらひらと動いている。イルカやサメのような尾びれが海の中のように夜空をかいている。

その影がどんどん近づいてきて、その影が何だかわかると、アキコはただ口をだらしなく開け、静かに「うわあ・・・」と言って驚くだけだった。

それは巨大なくじらだった。飛行船でもなんでもなくて、自分の何倍もあるくじらだった。それが目の前に浮かんでいる。

くりくりとした瞳でアキコをじっと見つめてくるくじらは、心の中に直接話しかけてきた。くじらの言葉が直接心に入ってくるのだった。

「そんなに気を張らずに、一緒にお散歩しませんか？」

「散歩って・・・」

アキコはわけもわからず、啞然としていた。こんな巨大なものと、どこを散歩すればいいのか。

「風が気持ちいいので夜空をお散歩しましょう。背中に乗ってください」

アキコは思わず見上げてしまった。大きすぎてとても背中までは遠い。くじらの背中まで登れるはずがないと思っていたら、目の前に淡い月の光のように発光したイルカが現れた。

「イルカが背中まで案内してくれるので、さあ」

アキコはくじらに言われるままにイルカに乗ると、くじらの背中まで飛んでいった。

その時に広がった星空の大きさが、胸の中いっぱい飛び込んできた。月も、星も、眼下に広がる街も、すべてがきらめいて心いっぱい広がった。

「わあ・・・綺麗・・・」

くじらの背中にひよいと飛び降りると、ウォーターベッドのように柔らかく体が包み込まれた。

これは夢なのだろうかと思ったが、それにしても感触がありすぎる。

アキコはくじらの背中に横たわりながら夜風を感じていた。さっきのビールの酔いもちゃんと残っていた。くじらの背中をぶにぶにと押してみる。ぎゅっと握ってみる。やわらかい。とても夢とは思えない。

「そろそろいきますか」

とくじらに言われるとアキコはぎこちなく返事をした。

「それでは出発」

くじらがふわふわと夜空を泳ぎだすと、月が目の前に迫ってくるようだった。

「凄い・・・まるで雲に乗っているみたい・・・」

生まれて初めてアキコは月が綺麗だと感じていた。飲み込まれてしまいそうなほどに大きな月。太陽の光がため息をしたように柔らかく、明るい光。地球にはこんな美しいものがあつたのだと感じた。

「どうしていままで気がつかなかつたんだろう・・・」

するとくじらが話しかけてきます。

「アキコさんは、何をそんなに苦しんでいるのですか？」

「別に、苦しんでなんかない」

自分の答に、きっと嘘だと思ったアキコはそれ以上に、悩みの種もわからなかった。

「自分が何で悩んでいるかもわからなくなっているのですね」

くじらの言葉を聞きながら、アキコは月をじっと見ていた。まるで染み込んでくるような淡い光が目の前に広がって、光の中へと包まれていった。

光がどんどん薄れてくると、アキコは別の場所に浮かんでいた。くじらもおらず、風船のように体が宙に浮かんでいる。ここはどこだろうと思いつつも懐かしさを感じていた。

「えー。パパもう行っちゃうの？もう少し長くいれないの？」

「パパはね、とっても忙しいの。入学式に間に合っただけでもよかったわよ。お仕事も忙しいみたいだし、今度帰ってきた時にゆっくりみんなで話しましょう」

ママの声だ、と思い、声のするほうを見ると、そこにはアキコの母と、中学の制服を着た、中学のころの自分がいた。  
(私・・・どうして?)

「すまん。次帰ってきた時にはたくさんお休みとれるから、その時たくさん話そうな」

男の声にアキコは、はっと振り向くと、男は車に乗って、出るところだった。

アキコは手を伸ばして男を止めようとしたが、宙に浮いているだけで動かない。母と中学のころの自分は、バイバイと手を振っている。

アキコはどうしても、男を行かせてはいけなかった。

「ダメ！ダメよ！行っちゃダメ！パパ！事故にあっちゃうのよ！行っちゃダメ！」

アキコの必死の呼びかけも虚しく笑顔で見送る母と自分。遠くへと行く車をアキコは見つられずに手で顔を覆うと、次の瞬間大きな激突音とガラスの細かな破片が飛び散るような音で、顔を覆っていた手をどけた。

「いや・・・パパ・・・そんなのひどい・・・」

ぐしゃぐしゃに変形した車と救急車やパトカーの赤ランプ。もう自分の父がどうなったかアキコは知っていた。ぼろぼ

ると涙を流してアキコは事故現場を前にうずくまって泣いていた。

「ひどいよ・・・どうしてこんな辛い思いを二度もしなきゃいけないの・・・」

初めて事故現場を見たショックで悲しみ一色に浸されたアキコは途切れることなく涙を流し続けていた。

「アキコ・・・」

「え？」

男の声でアキコが泣き顔を上げると月の光に包まれる父の姿があった。気がつくとかじらの背中に戻ってきていた。

「パパ・・・どうして・・・」

自分の父を目の前にしてアキコはどっと涙をあふれさせ、嗚咽しながら父の胸へと抱きついた。

父は優しくアキコの頭をなでながら「よしよし」と言ってあやしていた。

ただアキコは泣き続けた。父が死んでからというもの、こんなに思いっきり心の底から泣いたことがなかった。父に会えて嬉しい。生きていた父に会えた。辛かった。悲しかった。堰を切ったように、どっと様々な感情を乗せて涙が流れ続けた。今まで「大丈夫」「平気」「別に」そんな言葉たちで本音を隠し続けてきた自分がこれほど素直に泣けるなんて思いもしなかったアキコは十数年分の涙をしばらく流していた。

ようやく泣き終えたアキコは目を腫らせて父を見つめた。昔の黒かった髪とは違って、だいぶ白髪が増えて、目じりのしわも増えていた。

父はにっこりと笑って、「もう泣かなくていいのか？」と優しく言うと、アキコは「泣き疲れちゃった」と笑った。

「パパ、今まで何をしていたの？それに、だいぶ白髪も増えた」

アキコは単純に浮かんだ言葉を出した。もっと話したいことはいっぱいあるのに、どうしてか言葉がうまく浮かばなかった。

父は「色々とな・・・年をとってしまったな」とにっこりしながら答えた。

「今までずっとアキコのこと見守ってきたぞ。あまり飲みすぎるなよ。あまり人様を悪く言うもんじゃない。ああ、彼氏はちゃんとしっかりしたやつを選ぶんだぞ」

「なあに？久しぶりに会えたのにお説教なの？」

二人は見詰め合って笑い合った。

まるで時間はあっという間だった。たわいもない話ばかりだったが、アキコにとっては大事な時間だった。アキコは父からずっと目をそらすことなく見つめ続けていた。

「そろそろ、行かなきゃいけない」

「そっか・・・」

アキコは、父は元の場所に帰るんだ、と思った。きっとすぐに別れなくちゃいけないことはどこかで覚悟していて、ショックであることを押し込めていた。すると父は優しく、「あまり、強がるな」と、アキコの頭をまた優しくなでた。

するとまた自然と涙があふれてきて、アキコは声を上げて泣き出した。「行かないで」とは言えないアキコはただ泣くだけだった。

「いつでも、見守っているからな・・・アキコ・・・」

ゆっくりと父は光に包まれ、強く発光して消え去った。アキコは父の放った強い光に目を開けていられなくなり、まぶたをぎゅっと閉じた。

アキコが瞳を開けた時には、朝だった。ちゃんと自分のベッドの上で寝ているし、外は天気らしく、スズメが勢いよく鳴いているのが聞こえる。

「夢・・・だったのかな・・・」

その日、アキコは一日中ぼんやりしていた。夢の中の出来事が嫌に肌に残っていて、とても夢とは思えなかった。会社で、あまりにもぼんやりしているので友達にもだいぶ心配された。

結局、そのまま何をしたかわからないくらいぼんやりして部屋に戻ってくると実家から手紙が届いていた。

「ママだ。電話にすればいいのに」

アキコが実家に電話をかけ、「何かあったの？手紙なんかくれて」と言うと、「ああ、ちょっと忘れていたことがあったのよ！お誕生日おめでとう！アキコ」と、母の元気のよい声を聞くことができた。

アキコが何かと思って封筒を開けると、母のお誕生日おめでとうのメッセージと、古びて少しだけ黄ばんだ白い封筒がもうひとつ入っていた。

その封筒には、父の字で、「アキコへ」と書かれていた。裏には「アキコが大人になるまで開封厳禁」と書かれていた

。

「パパから？」

驚きながらも急いでアキコが封筒を開け、中身の手紙を取り出すと、こう書かれていた。

「大人になった愛するアキコへ。

直接口で伝えればいいとアキコは言いそうだが、こういうのもノスタルジックでいいだろう。未来のアキコ。きっと素敵な女性に育っていると思う。アキコは小さい頃から負けん気が強くて、男の子も泣かせることがあったくらい強い子だった。あまり想像はしたくないが、きっと男をねじ伏せるぐらいの迫力を持ったかわいい女の子になっていることだろう。アキコは顔はかわいいのだが、性格は男勝りで、俺も気が合う娘ができて頼もしい限りだ。暇なときでいいから晩酌の相手をしてくれると、とても嬉しい。きっと母さんとは離婚せずに仲良くやっていることだろうと思う。お互い愛しているからな。もちろんアキコのことちゃんと愛しているぞ。いつでも、アキコのことは愛している。大人になったら俺の趣味にたっぷりつき合わせてやるからな。

アキコ、立派な大人になれよ。他人を思いやれる大人になれ。痛みをわかってやれる大人になれよ。痛みを責める大人になるなよ。他人を愛することのできる大人になれよ。自分をちゃんと好きになれる自分になれよ。ちゃんと自分と他人のことわかってやれる優しい大人になれよ。アキコ、人を笑顔にできる立派な大人になれ。きっと、そうなることを願っている。この手紙を読む頃には、三人、いや、五人かも知れないが、家族みんなで笑い合える素敵な家庭を築いていると思うがな、アキコという大切な娘に心からありがとうを言いたい。

アキコに会えて、本当によかった。ありがとう。生まれてきてくれて、ありがとう。」

短い文面で書かれていた父の手紙を読んで、涙声で「もっと長く書いてよパパ」と、微笑みながらつぶやいた。自然と涙が止まらなくなっていた。

日付は、中学の入学式の前日だった。仕事の合間にできるだけ書いたんだ、と思った。

アキコはまたベランダでビールが飲みたくなった。今日も晴れ渡っている。少し欠けかかった月が綺麗に星空に咲いている。

「やめなよー。アキコおやじみたいだよ？」

友達の言葉をふと、また思い出した。なぜか思い出しても気にならなかった。それよりも、なんだか友達のことがかわいいなと思えていた。

プシュリッと缶ビールを開けると遠くのほうに影が見えた。

今日も、くじらが星空を泳いでいた。

## 鋏と蝶

---

悲しみの中で笑いを取り戻すことなど出来ないと、何度も思った。

悲しみが美しさが変わることなど、想像もしたくなかった。

「時が癒してくれる」なんて、残酷な慰めだと他人を責めた。

どんなに苦しくても、過去から気持ちだけ動けなくなっても、時間は進み、やるべきことは山積みになっていく。

人ごみにもまれ、知らない人が数多く通り過ぎ、夜は訪れる。

自分は誰になってしまったのだろう。

まるで抜け殻のように感じてしまう。

星の輝きが透き通りすぎていて冷たく感じる。

何かにもたれかかりたくなる。

体重をかけた途端崩れ去ってしまうような不安しかなくて、死ぬことを一瞬でも望んでしまいそうで恐ろしい。

馬鹿らしくも、止まらない心のえぐみが傷口を腐敗させていく。

居場所がない、居場所がないと、さ迷い続ける。

焼きついたような記憶も、いつかは薄れてしまうのだろうか。

苦しみが早く消えて欲しいと願っているのに、薄れてしまうことを心配するなんて、おかしい感情だ。

ビルの最上階のバーから街を見下ろす。

見上げると月が眩しいほど輝いている。

酔いすぎたのか、月が形を変えたように見え、やがて別の色が見え出す。

鳥が、見えたような気がした。

いや、それは蝶だった。

いや、やはり鳥だろうか。

光が羽ばたきながら近づいてくる。

酔いすぎたかと目をそらそうとすると、右手に光はとまり体を持ち上げていく。

その光の中で、思い出をなぞっていた。

あたたかなものもたくさんあった。

嬉しいものも、楽しいものも、笑顔に満ちていたことも。

怒ったり、喧嘩をしたり、傷つけられたり、傷つけたり。

愛したかった。

愛されたかった。

気がつけば街明かりが滲んでいた。

センチメンタルな感情。

家に戻れば写真の中の幸せそうな二人。

思わず手にとって、写真を破り捨てようとし、思いとどまる。

いつも使わない引き出しの中に入れて、いつか笑える日まで閉じ込めておく。

本当は、愛してほしかっただけなんじゃないかと思い、酔いが深まり、くるくる回る世界で一人笑う。

記憶を切れる鉄があったなら、ズタズタに切り裂いていただろうか。

都合よく傷を負った相手を切り離せるものがあつたら、切り離していただろうか。

それは、きっと、何も守ろうとしていなかった、ということだ。

鉋は、使わない。

それは弱い心なのだろうか。

新しいもので塗り変えてしまえば、世界はまた美しく、ごく普通に見えてくる。

愛を請う人。

ただ一途に愛されたいだけの、弱い人間。

愛していたと思いきや、笑えない冗談だ。

そう思った途端、蝶の光は窓ガラスに張り付いた指先からビルの向こう側へと飛び、朝日を誘った。

ありがとう。

ひと時でも、愛をくれて。